

即興六連超短篇

cydonianbanana

隣人 *neighbours*

来ヶ谷が校庭のベンチで本を読んでいる。背表紙に「Une vie」と書かれており、それはたぶん『女の一生』の仏語版である。彼女が頁をめくると、そこに小さな挿絵が現れる。そこには小川のほとりで本を広げる恋人たちの牧歌的な風景が描かれている。僕はその挿絵から目が離せなくなり、その様子を見て来ヶ谷が顔を上げ、なにかを言いかける。次の瞬間、あたかも雲が陽光を遮るように大きな影が頭上を覆う。それは、頁をめくるぼくの手である。

ぼくは本を閉じ、空港の搭乗口へと向かう。ぼくはシンシナティに飛ぶ。LAに。ロンドンに。スチュワーデスは僕の顔を覚えるようになる。ゆく先々でレンタカーを借りて、それらしい場所をみつけては白いカンバスを設置して回る。ぼくはなにも描かない。カンバスは手つかずのまま誰の目にも止まらず放置される。それがぼくの目的である。顔見知りになったスチュワーデスの悲鳴が聞こえ、とてつもない衝撃とともにぼくを含めた乗員すべての命が失われる。あいつはスクリーンでその一部始終を鑑賞する。

映画に導かれるまま、週末ごとに成田へ通うあいつのことを、われわれは不気味に思っている。あいつはシンシナティに飛ぶ。LAに。ロンドンに。ゆく先々でレンタカーを借りて、それらしい場所を探してみても、白いカンバスはどこにも見つからない。われわれは何度もあいつに忠告したが、それらが聞き入れられることはない。世界各地をめぐるうちに、映画に登場した場所で、あいつはいくつもの写真やノートを手に入れる。それらのなかで、ぼくはどんどん歳をとっていく。映画のなかでは二四歳だったぼくは、いつしか四九歳になっている。急がないとぼくが死んでしまう。あいつは以前にも増して熱心に飛行機に乗る。

数年後、カンバスはついにキューバで見つかる。カンバスにはすでに風景が描かれており、その中にぼくがいる。絵のなかのぼくは、あいつを手招きしている。その日を境にあいつは姿を消し、われわれには困惑だけが残される。

「静かな豪雨」をテーマにして小説を書けと言われ、書きはじめる。はじめに考えなければならぬのは、「静かな豪雨」をどのように実現すればよいかということだ。豪雨は一般的に激しい雨音をともなう。それどころか、むしろ「豪雨」という単語そのものが、無条件に騒々しさを想起させるのだ。ではどうすれば静かにできるのか。結果思いついたのは、耳が聞こえない主人公を登場させることである。この安直な思いつきにしたがい、まずはじめに聾啞の男があらわれる。

聾啞の男はベッドタウンの一軒家に一人で暮している。男は作家だが、聴力を失ったからは一作も書き上げられない。脳と目と指さえあれば作家を続けられると信じていた頃が懐かしい。男は生活のために、彼の《耳》を雇うことを決意する。

どうせ雇うなら若い女がよい。文化的教養のある若い女だ。ただし、かならずしも文学に精通している必要はない。むしろ小賢しい文学的修辭とは無縁であるほうが、男としては都合がよい。《耳》には純粋に聴力をのみ提供してもらい、それ以外の部分はすべて作家の仕事とする。比喩やレトリックを駆使する《耳》ほど厄介なものはない。また、郊外にある男の自宅まで通うために、自由に車を扱える必要がある。手話に通じている必要はない。ディスプレイ上で会話することになるため、タイピングの速度が重要である。新聞に広告が出され、女が面接を通過するまでに三ヶ月が経過する。

女の表現には見事に飾り気がない。それは一つの才能である。真に飾り気のない文章を書ける人間がこの世界にいったいどれだけいるだろう。女は作家の描写に必要な音を文章という形で提供する。ときには取材に出かけて音を蒐集し、作家の《耳》としての役割を十全に果たす。やがて女は男の家に住み込みではたらくようになる。「君は素敵だ」という言葉が夜のベッドでノートに綴られる。

ある日、女は不思議な音が聞こえる旨をディスプレイ上で告げる。男は困惑する。家のなかに響くという犬の鳴き声。だが男にはペットを飼っていた経験さえない。聞き間違えなのではないか？ 男は筆談用のノートに綴る。なにしろ窓の外は大雨だ。雨や雷の音を、聞き違えたのではないか？ もうじき一作書き終える。変な音のことなんて忘れてしまえ、と。

しかし《耳》の変調はエスカレートする。それから一週間後、男の《耳》は肉が切り裂かれる音を聞き、したり落ちる血の音を聞き、声にならない悲鳴を聞く。しかし、降り続く豪雨の音はついぞ聞かれない。男は担当者を尋ねて出版社へ赴き、そのままビルの九階を飛び降りる。

「静かな豪雨」というテーマで小説を書きおわり、息をつく。すると机の上に男が仰向けに横たわっている。起きだした男は、どうやら聾啞のようである。男は一冊のノートをこちらへ手渡し、そのまま立ち去る。

群馬の奥地で話者二名の未知の言語が発見される。言語学者たちはこぞつて群馬へおもむき、文明の光が届かない山の奥を目指す。

未知の言語を話すという二人は、いずれも老いさばらえた男である。言語学者たちは苦心してその二人に日本語を教え込み、コミュニケーションをとろうとするも、ことごとく失敗する。どうやら彼らの操る言語は、われわれの言語とは根本的に違った様式をもっているようである。そして、なお悪いことに、二人の老人は仲が悪いらしい。二人は顔を合わせれば罵倒しあい、殴り合いを始める。そのために、二人の正常な対話からその言語のなりたちを調べることができない。

二人の言い争いをつぶさに記録していた言語学者の一人は、彼らの言語がモノローグをもたない可能性について語る。すなわちダイアローグによつてのみ成立する言語である。二人の言語はある種数学の計算のように展開される。はじめに或る言説からはじまり、そこに或る言説がつづく。二つの言説の関係は厳密な規則によつて決定され、その規則は話者の性質に依存する関数のようなものである。したがつて一人の人間によるモノローグは、つねに同じ言説の連なりをしか生み出さず、それらはすべて同質であるがゆえに存在する意味をもたない。すなわちこの未知の言語は、対話のなかにのみ存在する。しかしその真偽を確かめるためには、二人の老人による円滑なコミュニケーションの観察が必要である。

言語学者たちは、それぞれの老人から身振り手振りで事情を聞き出すことに成功する。それによると、どうやら老人Aの妻を老人Bが寝取ったことが、二人の不仲の原因であるようだ。関係の修復は絶望的である。そのうえ老人Bとすでに他界した老人Aの妻は、かつて婚約者同士であつたという。この複雑な事情を背景に、やがて老人Aにつく学者たちと老人Bにつく学者たち、そして二人の関係を修復の目指す学者たちによる三つ巴の抗争がはじまる。抗争のなかで老人Bが命を落とす。

人類は一つの言語と、それに付随する多くの概念を永久に失う。

二三世紀、人類はタイムマシンを手にした。それはウエルズが創造したものと異なり、人間を運ぶことができない。かわりに記憶を送った。過去へ転送された記憶は誰かの頭に受信され、受信した者は予知夢のようなものとしてそれを解釈した。このシステムを利用して儲けようとするものが後を立たないので、ひとびとは時間管理官を任命し、記憶転送にまつわる規則の運用を一任した。俺は時間管理官の一人となった。

近所のジャスコで日用品を買うついでに、フードコートでタコ焼きを買う。あたしはじめて食べたときからタコ焼きのことを愛している。自室に戻ってタコ焼きを食べながら、あたしは *macbook* を開いてメールをチェックする。メールは一通も受信されない。

宝くじの結果が記載された新聞記事を蒐集している不審な男がいるという通報を受け、俺は現地へ急いだ。宝くじの当選番号を過去に転送したところで、受信される人間はこちらで選べないのだから意味がない。都合よく過去の自分の頭に当選番号を送ることができる確率と、宝くじを当てる確率との間に、大した差があるとは思えなかった。俺はその哀れな男を逮捕し、取り調べを部下に任せて次の事件を追った。

夕食後の腹ごなしに外へでる。セイコーマートの前を通るとき、ニット帽を深くかぶった男とすれちがう。男の肩は震え、その足下をにらむ目に気はなく、白痴めいている。あたしはその男に見覚えがある。男はなにか独り言をしている。近くに寄って聞いてみると、「人類はタイムマシンを手にした。それはウエルズが創造したものと異なり、人間を運ぶことができない……」などとつぶやいている。男はポケットに手を入れたまま、あたしに気づかずフラフラと歩き続ける。あたしは男の後をつけることにする。

俺は記憶転送違法者を追いつめるために、痕跡を探し続けた。記憶を転送するとき、何らかの造形が副産物として残されることが知られていた。それは記憶が転送されることによつて生じる空白部分と、転送先に生じる余剰部分との相互作用によつておこる効果と考えられていた。犯人の記憶の副産物は、花の形をしていた。俺はその花を探して街中をかぎ回った。

男は寂れた公園の前で足をとめる。男は「記憶が転送されることによつて生じる空白部分と、転送先に生じる余剰部分との相互作用……記憶の時間依存性……」などと抑揚なくつぶやきつづける。あたしは男が、ジャングルジムのなかにもぐりこんで、なにかの花を摘む様子を眺めている。あたりが暗くてそれが何の花なのかはわからない。満足そうな顔を浮かべる男が誰なのかも、結局あたしには思い出せない。

幻想少女がどこからやってくるのかを知る人間はいない。彼女はある日、横断歩道をわたっている最中に、自分がすでに生まれているということに気づく。そこに居合わせた誰もが少女の来歴を知らないし、バスの運転手はバス停に立っている少女を無視して素通りするし、セブンイレブンの店員は黙って菓子パンを持ち去る少女に目をくれようともしない。少女の姿は誰にも見えないのである。毎日のように街をうろついては、すべての事物が自分を透過するのに身を任せる。夕方までには国道沿いの廃屋に戻り、冷たいコンクリートの床に眠る。

一ヶ月経ったところ、幻想少女はJRを乗り継いで大きな街へやってくる。ヨドバシカメラのパソコンコーナーからラップトップを一台持ち去り、人気のないホームシアターのコーナーでそれを開く。彼女は毎日のようにEvernoteを開き、街で見たあらゆるものを文字におこす。いつしかEvernoteは少女の記憶そのものとなる。

少女が自分を見つけてから三年経ち、いつものようにEvernoteを開くと、そこに見知らぬノートがある。ノートには幻想少女についての文章が綴られており、その内容に身に覚えはない。そもそも彼女は自分が見たものしかノートに書かない。彼女にも自分自身は見えないのだ。見知らぬノートは日を追うごとに増殖し、彼女は自分が困惑していることを知る。

あるノートには、《また水死体が流れってくる。幻想少女じゃないかと權でひっくり返して確認する。女のむくろだった。水がぬるいから腐敗も早いし、臭気もひどい。半面の肉がこそげおち、眼窩にぽっかり闇を湛えている。ぼくの知らない幻想少女がまた忘れられて流されてゆく。手をあわせるのは面倒だからしないよ。》と書かれている。

またあるノートには、《僕が幻想少女のとりこになつて五つの理由…一、大地と海とを同時に想起させる雄弁な沈黙。二、明確、しかし無限に変化する。三、安定、と同時に不安定。四、静かな和音、しかし遠慮なく自己主張する。五、内部に無限のエネルギーをはらむ単純な緊張》と書かれている。

またあるノートには、《幻想少女の薬指の先から一本の青い糸が出てたので験しに引つ張つてみるとあれよあれよと言う間に幻想少女の全身が解けていつて最終的に一本の長い糸になったので僕はそれで見事な青いマフラーを編み上げたのち自分の首に幾重にも巻きつけ両端をガッチリと固定した上で十階の窓から飛び立ちます》と書かれている。

少女の記憶として機能していたEvernoteの変調によつて、少女は自分が自分であるということに気づく。幻想少女は、ついに自分自身の姿を見たのだ。その衝撃で少女は消滅する。

少年の一目ぼれだった。少年のアクロバティックな告白が、少女を殺したのだ。

昨日ルートヴィツヒ・ベルネと夜中にSkypeで話しているとき、彼は出し抜けに「三日間で独創的な作家になる方法を知りたいかい？」と言った。気になったので訊いてみると、彼は「三日間部屋に閉じ籠もって、頭に浮かんだことをすべて書きなぐる。それだけだ」と応えた。本職の作家が言うことだし、と興味をもったぼくは、三日間部屋に閉じ籠もるまではいかないけれど、ちよつと験してみようと思った。いまからそれを実行してみよう。

脇のあたりが湿っている。風呂あがりですぐ服を着るとこうなる。でも冷え込んだ部屋のなかで裸でいるわけにもいかないので仕方がない。湿ると言えば、冬に自室で座っているときとだんだん足が湿り気を帯びていく感じがする。あれはなんなんだろう？あまり気持ちのいいものではないのでやめてほしい。それから鼻水。宿酔いときはとても粘り気がある。多分身体に水が足りないからなんだろうな。

気づいたけど、思いついたことをすべて書くというのはとても難しい。どんなに恥ずかしいことも、どんなにつらいことも、思いついてしまったら書かなければならない。あかさたな、はまやらわ。あかさたな、はまやらわ。あ・か・さ・た・な・は・ま・や・ら・わ。こうして意味のない文言が頭に浮かぶ意味って？ 小学校のマラソン大会の時、頭のなかで走りのリズムに合う文言を繰り返して繰り返して唱えていたのが思い出される。健・康・診・断、健・康、診・断、健・康、診・断、健・康、診・断、健・康、診・断、……。

きつと今ぼくは何も語っていない。なぜなら《語る》という行為は、じつのところ《語る》ない事柄を切り捨てていく《行為だからだ。自動筆記マシンはなににも語らない。湿り気。いちど一つのことを考えてしまうと、それから逃れるのは難しい。今度はヘッドホンに密閉された耳が気になって仕方がない。ここまでで七六八文字書いた。三日間籠もりきりで書きつづけたら何文字になるのかな？ あ、ベルネがSkypeにログインしてみたんだ。

自分で自分がなににも考えていないと思つているときに、自分が本当はなにを考えているのかをここに書くことはできない。頭の中にある雑音をここに書くことはできない。言葉にできるものしか、ぼくには書くことができない。

ぼくには昔からずつと不安に思つていることがあつて、それがいま不意に克服されつつあることに気づいている。ふん、ふん、ふん、ふん。こうして考えつくことすべてを書いている。こうして書かれていくこれは、だからぼくの思考そのものだ。思考はつねに言葉の形をとる。ぼくは心配だった。ぼくはほんとうにここにいてるのか。ぼくは自分が考えていると思つていだけで、実際はなににも考えていなくて、それどころかぼくはどこにもいなくて。なんというか、ぼくは存在していなくて、はじめに真空のゆらぎみたいな言葉だけがあつて、それがあたかもぼくという形をもっているかのような思考を形作っているだけなんじゃないか。うまく言えないけれど、そういう心配をずつとしていた。ふん、ふん、ふん、ふん。でも、こうして自分の思考をただ書きなぐっていると、なんだか自分の思考が、たしかに存在するこの身体によつて、この指によつて書き出されているという実感が湧いてくるのだ。自分がたしかに存在している気がするのだ！

ぼくの長年の不安は、いま克服されようとしている！

いま大事なことを考えていて忙しいのだから放っておいて欲しかった。仕方ないのでベルネからの通話コールをクリックする。この高ぶった気持ちも、元はと言えばベルネのおかげなのだから。「出力を見る限り、問題なさそうだ」ベルネの声が聞こえるが、その言葉はぼくに向けられたものではない。「これほど良い結果が出てくるとは思いませんでしたね。次はまた少しパラメーターをいじってテストしてみましよう」誰と話してるんだ？ ぼくはなにも言えない。「しかし、本質的な問題は解決していかない。無意識の存在をどのように観測すればいいのか。いまはただプログラムのなかにWrite文を仕込んで、そのときに演算されている思考をテキストデータとして吐き出させているに過ぎない。この結果はたしかに人間の思考にしかみえない。だが、この思考のバックグラウンドに、我々がもっているのと同じような無意識があるのかは、このテストからではわからない」「そもそも無意識を出力させるにはどうすればいいのかのアイデアさえもない状況ですからね」「しかし、まあ今回のテストはうまくいったんだ。あとは無意識の問題さえ解決すれば完成なんだから、気楽にいこう」「はい」